

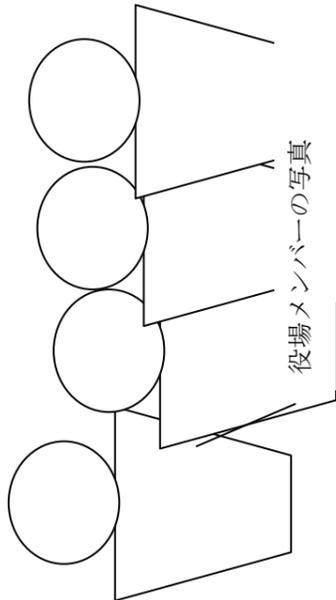
## 当面の取り組み

今後、〇〇町では災害時要援護者の支援策として

- ① 地域における避難支援体制の検討
- ② 地域における情報伝達体制の検討
- ③ 避難所の再設定の検討 等

について取り組んでいきます!

△月末には、防災マップ(案)を作成した後、全戸に配布し、①～③の検討のために活用します。さらに、各地区での**出前講座の実施やワークショップ等を開催し、継続的に町民のみなさまといっしょに〇〇町の防災対策について取り組んでいきます。**



役場メンバーの写真

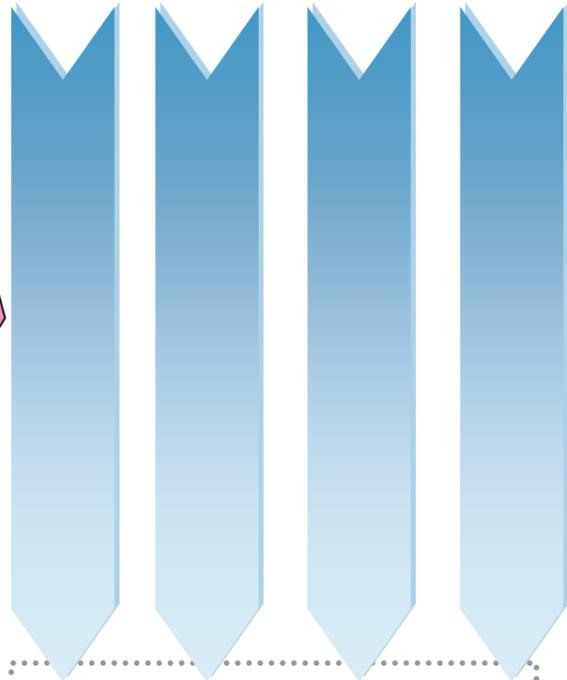
### 質問へのお答え・・・

- ① 今後のスケジュールは、・・・
- ② 組織作りは、ワークショップで行った取り組みを出前講座等を活用して、町内全域に拡大して行く予定です。
- ③ 避難場所については、現在作成中の防災マップをもとに最適な避難所の設定について町民のみなさまと考えていきます。
- ④ ワークショップの結果の反映として・・・

## 長期的な取り組み

支援メニューの中から、役場が主体であるもの、地区住民の協力が必要なものを抜粋して記載します。PPできれば、首長の言葉として、PP P (パブリックプライベートパートナーシップ官民共同) を意識付けられる内容が望ましいです。

町として、記載すべき長期的な取り組みについて、下の青の矢印内に記載します。



〇〇町総務課

連絡先



# 1

〇〇町防災ワークショップ

# タイトル

広報紙

2006. 03 発行

## 防災ワークショップを開催しました!

〇〇町では、●●河川事務所と協力して、災害時の避難に困難を伴う高齢者や身体障害者等の方々の支援について検討しているところです。

この検討の一環として、このたび、〇〇地区と・・・地区の住民の方々にご協力いただき、〇〇町では初めての試みとなる防災ワークショップを開催しました。

これは、2回開催したワークショップの概要とそこでもいただいたご意見を報告するものです。また、今後の取組みの予定についても記しています。

### ワークショップの概要

防災ワークショップでは、〇〇町役場の職員による寸劇や、読話による伝言ゲームを行い、体が不自由な方の気持ちや体験していただきました。また、地図を使って、地区における防災の課題やそれを解決するための対策について、活発な意見交換を行いました。

\* ワークショップとは、行政から住民への一方通行的な説明や伝達ではなく、住民側も積極的に「参加」し、アタマや言葉だけでなく「体験」をとおして、「参加体験型のグループによる学習や創造の場」として用いられています。

【〇〇地区】 平成〇〇年△月△日(■) : ~ : 〇〇地区公民館 参加者 参加者 名 名  
 【・・・地区】 平成〇〇年◎月△日(▲) : ~ : ・・・地区公民館 参加者 参加者 名 名

### ワークショップの流れ



### 参加者の感想

#### 参加してよかったこと・・・

- ・考えるきっかけになった
- ・寸劇が良かった
- ・年代や職種が違ふ人と話せた
- ・具体的な話し合いで良かった



#### 参加して悪かったところ・・・

- ・全体像が見えない
- ・資料に不具合があった
- ・時間が短かった
- ・参加者が少ない

#### 提案!

- ・今後も継続的に活動する必要あり
- ・しっかりとした防災計画が必要
- ・役場からの情報提供
- ・ネットワークづくりが必要

#### 質問!

- ・今後の日程、組織づくりは?
- ・避難場所を多くできないか?
- ・ワークショップ結果の反映は?

(写真)

議論の様子

## 地区から頂いたご意見等の数々

- 地区では、以下のご感想やご意見を頂きました。

### ◇読話による伝言ゲームの感想

- 疑似体験をしたことで、耳が自由な方の気持ちを少し理解。

### ◇寸劇を見た感想

- きちんと、「直接確認」することが大事。
- 避難場所にいけなかったという事実を知らせることが大切

### ◇その他に感じたこと

- 近所にどうという者がいるかわかからないことが多い。
- 防災無線は、風やテレビなどの音で聞こえない。
- 災害により避難場所はある。
- 今災害がおきても対応できないことが多い。
- 避難場所には車であった。

### 寸劇の様子

(写真)

### ◆自ら取り組みること

- 防災訓練に参加する
- 避難したことを自らも伝える（札等の活用）
- 防災無線を設置する
- 最低限の手話を覚える
- 避難場所を分かりやすいところに貼る
- 水害への意識をきちんと持ち、避難場所を理解する

### ◆みんなで取り組みること

- 近所で声を掛け合い、連帯感を高める
- 一人暮らしや体の不自由な方を把握する
- 情報の伝え方を決める（役割分担）
- ネットワークを広げる（隣の地区へ）
- 災害時は電話ではなく無線を使う
- 耳が不自由な方へは文字や光で
- 気になったことは必ず直接確認する
- 手をつないだり、肩をたいたり、文字に書いたりして、避難情報を確実に伝える
- 要援護者の誘導担当を決めておく
- みんなで助け合う
- 除雪ボランティアの方に避難援助もお願いする
- 地区ごとに責任者をさだめて最終確認をきちんと行う
- パニック防止のため、集団行動をする

### ◆役場が取り組みること

- 危険カード、防災マップ等の作成
- 非常時の放送は、正確でわかりやすく、適切なタイミングで何度も伝える
- ケーブルテレビ、NHK、民法等に協力要請（テロップ）
- 防災無線を全戸設置（補助する）
- 防災無線の機能を高める（聞こえるようにする）
- サイレン以外に補助的な手段（パトライト）を確保する

- 正確な災害シミュレーションが必要
- 地区の実情にあった避難場所、ルート
- 改善センターより浜のほうが安全
- 青少年ホームが近い
- 先ずは近くに避難（1次避難）
- 災害種別、災害レベルごとに避難場所を決める
- ハリポートを活用する
- 舟を避難に使う
- 避難方法の周知徹底
- 水はけを良くする
- 車イス、荷車、ストレッチャー、ゴムボートの配備（防災備蓄倉庫）
- バスによる集団避難（バス会社との協定）

## 地区から頂いたご意見等の数々

- 地区では、以下のご感想やご意見を頂きました。

### ■役場が取り組みること

- 非常時の放送は、正確でわかりやすく、適切なタイミングで何度も伝える
- サイレンの種類で緊急度を区別する
- 役場の車両で広報する
- ケーブルテレビ、NHK、民法等に協力要請（テロップ）
- 危険カード、防災マップ等の作成
- 時間帯別のマニュアルを作成する
- 情報共有、システム化
- 過去の災害で得た教訓を浸透させる
- 防災無線の全戸配置
- 防災無線とサイレン、アラームの併用
- 避難方法（徒歩・車）の周知徹底
- 民間企業との連携（飲料会社を避難場所）
- ポータルやハリコプターの活用
- 正確な災害シミュレーション、水害マップが必要
- 地区の実情にあった避難場所、ルート
- 〇〇小学校より公民館（地盤が高い）
- 消防団員による要援護者への支援
- 側溝の管理、改修
- リヤカーや防災備蓄倉庫の整備
- 水浸ししない避難ルート
- 外灯の整備（夜間の避難を安全に）

### ■自ら取り組みること

- 日頃から役場の放送に注意する
- 防災無線、ラジオ、避難袋を用意する
- 災害意識を持ち、家族で話し合う
- 避難したことを自らも伝える（札等の活用）
- 要援護者も（災害情報を）知る努力をする
- 〇〇小学校への避難は、通いながら通学路を利用する

### ☆その他に感じたこと

- （緊急時とはいえ）他人の家には入りづらい。
- 川が決壊すれば、地盤の高低は関係ない
- 電話番号を公開するのは嫌。
- 日頃の備えが大切。
- 要援護者に伝える努力と、要援護者には知る努力が必要。
- 小さい子供がいると周りのことまで気がまわらない。

(写真)

昭和 年洪水時の濁流中の田んぼ

青：情報伝達のあり方についての御意見  
紫：避難行動の実施方法についての御意見

### ■みんなで取り組みること

- 連絡方法を事前に確認
- 班長による近所の状況把握
- 連絡網の作成
- 近所で声を掛け合い、直接確認する
- 手をつないだり、肩をたいたり、文字に書いて、避難情報を確実に伝える
- 回覧板（至急手渡し）、音より光、「逃げる！」の看板、鐘や太鼓等々
- 電話連絡は難しい（着信拒否「184」、複数の電話番号等々）
- 水防組織をつくる（12～13軒）
- 向こう3軒両隣で避難ルートを確保
- 防災訓練（お年寄り等に逃げ方を事前に教える）
- 地域のネットワーク、婦人会といった組織が大事（個人の活動が多い）
- ボランティアの活用
- みんなで助け合う（地域で役割分担、地域で確認）
- 元気な人は徒歩、要援護者は車による避難
- 公民館（1次避難場所）に集まり、小学校（2次避難場所）に逃げる

(写真)

昭和 年洪水時の●●川の濁流

### ☆寸劇を見た感想

- きちんと、「直接確認」することが大事。
- 自分勝手な解釈は周囲に迷惑をかける。

### ☆読話による伝言ゲームの感想

- 疑似体験をしたことで、耳が自由な方の気持ちを少し理解。